「食事の仕方」思い出すよう支援

「愛の家グループホーム中野弥生町」（東京都）
277
ホーム長・田草川麻里

2013年の開設当初から入居している小森つやさん（仮名）は、21年2月に誤嚥（ごえん）性肺炎を発症し入院しました。入院中は高カロリーの栄養補助剤しか摂取することができず、このまま食事できない状況が続けば、命に関わるという状況でした。

退院後、一口でも多く食べられるようになってもらいたいと思い、さまざまな角度から支援を検討しました。小森さんは「自分で食べる」という行為自体を忘れてしまっていました。そのため、自分で食事をしている利用者と同じテーブルで食事をすることで、視覚情報から動作を想起できるようにしました。介助する際も小森さんの手を取ってスプーンを口に運び、動作から食べることを思い出してもらえるように工夫しました。他の利用者と一緒に「美味しいね」と声を掛け合い、食事の楽しい雰囲気を感じてもらうことで小森さんの食事についての記憶を引き出すように働きかけました。

また、小森さんは机の木目や皿の模様に注意が向いてしまい、食事に集中できていない様子が見られたため、机の木目を見えないようにテーブルクロスを敷き、食器も柄のないシンプルなものに変更しました。このほか、家族に情報を得ながら好みのものを探す努力もしました。取り組みを継続すると、少しずつ自分で食べることが増えていき、時には介助をすることもありますが、毎日完食できるようになりました。一時は命の心配もあった小森さんですが、先日101歳の誕生日を迎え、家族や他の利用者、職員と共に祝うことができました。

「愛の家グループホーム中野弥生町」で笑顔を見せる小森つやさん

食事を取れなくなる要因はさまざまありますが、食べるという行為を思い出すことが難しくなるのも要因の一つです。生活の中で動作のヒントとなるような環境をつくることで、もう一度できるようになります。

「愛の家グループホーム中野弥生町」では、「わが家のように支え合い、笑顔の絶えないホットホーム」を事業所の理念に掲げ、自分の大切な人を安心して預けることができる事業所を目指しています。